



擬態語動詞の統語構造

著者	影山 太郎
雑誌名	人文論究
巻	56
号	1
ページ	83-101
発行年	2006-05-25
URL	http://hdl.handle.net/10236/6323

擬態語動詞の統語構造

影 山 太 郎

Abstract

Contrary to Tsujimura's (2001, 2005) assumption that mimetic verbs like *burabura suru* 'move in a swaying manner' are devoid of tangible meanings, it is shown that they do have more or less the same range of solid semantic and syntactic properties as ordinary lexical verbs. By distinguishing two major groups of mimetic verbs in terms of Lexical Conceptual Structure, one denoting an Agent's controllable actions and the other denoting a Theme's non-controllable states, this paper demonstrates that this semantic demarcation of the two groups of mimetic verbs is directly correlated with the syntactic realizations of their subjects: Whereas the subjects of controllable mimetic verbs occupy the external argument position, those of non-controllable verbs are shown to stay in the internal argument position. This demonstration provides fresh evidence for the rigid semantics-syntax correspondence as envisaged by the Unaccusative Hypothesis.

1. はじめに

「フラフラ、グズグズ、あっさり」といった擬態語 (mimetic words) は、一見したところ明確な品詞も意味も統語機能も持たないように見える。そのため、これまでの言語学的研究で擬態語および擬音語が取り上げられたのは、音声的・音韻的な性質と、文体や表現力といった修辭的な側面に限られ (Hamano 1998, 田守・スコラップ 1999 など)、理論的な意味論および統語論において、擬態語の構造を正面から論じた研究は皆無であると言ってよい。

しかしその中で、Kita (1997) と Tsujimura (2001, 2005) は、擬態語の意味と統語的用法について不十分ではあるが興味深い議論を展開している。Kita は、擬態語が通常の語彙と異なり、“affecto-imagistic meaning” と呼ぶ

感覚的・感性的な意味の性質で特徴づけられると論じた。Kita への反論として、Tsujimura は、擬態語は単独では明確な意味を持たず、それが用いられる構文において具体的な意味を帯びるようになるとして、構文文法の考え方を支持している。

これらに対して、Kageyama (近刊) では、辞書 (阿刀田・星野 1995, Kakehi, Tamori and Schourup 1996) およびインターネットから収集した多数の擬態語動詞 (「フラフラする」のように擬態語に「する」が付いた形) の意味分析を通して、擬態語が一般の語彙項目とほぼ同等の性質を有することを明らかにしている。具体的に言うと、擬態語動詞は (網羅的ではないかも知れないが) 典型的には (1) に示す 7 つのタイプに整理され、それぞれが特徴的な語彙概念構造 (LCS) を有している。

(1) 擬態語動詞の分類

- | | |
|---|---|
| A | <p>Type 1 : 一家のあるじは毎日<u>あくせく</u>する。
 [x ACT<Manner α>] (主語 x が、擬態語によって表される様態で活動を行う)</p> <p>Type 2 : 母親が赤ちゃんの背中を<u>トントン</u>する。
 [x ACT ON<Manner α>y] (主語 x が対象 y に対して、擬態語によって表される様態で働きかけを行う)</p> <p>Type 3 : 旅行者が観光地を<u>うろうろ</u>する。
 [x CONTROL[x MOVE<Manner α>[Route]]] (主語 x が経路 y を、擬態語によって表される様態で移動する)</p> <p>Type 4 : 私は試験の結果に<u>がっかり</u>した。
 [x EXPERIENCE[BECOME[x BE AT-[PSYCH.STATE<Manner α>ABOUT-z]]]] (主語 x が対象 z に対して、擬態語によって表される心理状態を経験する)</p> |
|---|---|

B

Type 5 : 頭がズキズキする。

[Spk[^] COGNIZE[Spk's-[BODY-PART]MOVE<Manner α>]]

(話者 [Spk] は自分の身体部分 [body part] が, 擬態語によって表される異常な動きをすることを感ずる)

Type 6 : 椅子がグラグラする。

[Spk[^] COGNIZE[EVENT y MOVE<Manner α>]]]

(話者 [Spk] は物体 y が, 擬態語によって表される異常な動きをすることを感ずる)

Type 7 : このラーメンは味があっさりしている。

スy[Gen_w[w[^] COGNIZE[x BECOME[x'y BE

AT-[STATE<Manner α>]]]]] (Gen=generic operator)

(物体 x の一部分である y が, 擬態語によって表される性質を有すると, 誰もが (Gen_w) 感ずる)

Type 1 は「あくせく／あつぷあつぷ／がつかつ／ぐずぐず／へらへらする」など主語の意図的な行為を表し, 擬態語自体は **ACT** の具体的な様態を描写する。**Type 2** は「～をどんどん／とんとん／ぐりぐり／フーフーする」のように意図的な働きかけを意味する他動詞であり, 擬態語 (あるいは擬音語) は接触 (**ON**) の様子を表す。**Type 3** は, 「場所をぶらぶら／うろうろ／ちよろちよろ／うろちよろする」のように移動の中間経路 (**Route**) を表すヲ格名詞句を取ることが特徴的で, 擬態語自体は移動の様態を表す。**Type 4** は「がっかり／びっくり／ひやひや／ひやと／いらいらする」のような心理動詞で, 擬態語は, 主語が被る特定の心理状態の様子を表現する。これら 4 タイプの主語は, **Type 1** から **Type 3** では行為者 (**LCS** では **ACT** [行為]あるいは **CONTROL** [制御された使役]の主語)であり, **Type 4** では経験者 (**EXPERIENCE** の主語)である。意味役割は異なるものの, これらの主語はいずれも自己制御性を備えており, 「あくせくするな／うろうろするな／がっかりするな」のように (否定)命令形で用いることができる。行為者および経験者は外項 (**external argument**) に当たり, 統語構造では **VP** より上に生成される。主語が外

項であるという点で、**Type 1** から **Type 4** をひとまとめにして、**A** グループと呼んでおく。

これに対して、**Type 5~7** の主語は自己制御性を持たず、「*（頭が）ズキズキするな/*（椅子が）グラグラするな/*（スープの味が）あっさりするな」のように言うことはできない。**Type 5** は、「肌がかさかさ／頭がずきずき／膝ががくがく／舌がひりひりする」のように、話者の知覚による身体部分の不随意的な動きを表す。**Type 6** はの「椅子がグラグラ／戸ががたがた／表面がねとねと／セーターがちくちくする」などで、話者の知覚による物体の特異な動きを表現する。最後の **Type 7** は「スープがあっさり／山がこんもり／布団がふんわり／態度がきびきびしている」のように、誰もが知覚できる物体の特徴的な性質を表す。**Type 5~7** は、ガ格で表される主語が行為者や経験者ではなく、動きや性質を帯びた物体（いわゆる **Theme** [対象]）であるという点で一括り（**B** グループ）にすることができる。**Theme** は内項（**internal argument**）に当たり、統語構造では **VP** の中に生成される。なお、**B** グループでは、**LCS** においては当該の動きや性質を直接的に知覚（**COGNIZE**）する人物——**Type 5, 6** では典型的に話者 [**Speaker**]、**Type 7** では人々一般 [総称]——がいるはずであるが、これらは通常、表面上は現れない。上掲（1）では、意味構造には存在するが統語構造には表面上、姿を現さず、抑制（**suppress**）されることを ^ 印で表示している。

以上で、7つのタイプの擬態語動詞が持つと考えられる **LCS** を略述したが、真に重要なのは、これらの意味構造が統語構造とどのように対応するかという問題である。これまで広く受け入れられてきた考え方は、動詞の統語的な振舞いは、その意味構造から予測できる（**Levin 1993**）というものであった（具体的な理論については **Levin and Rappaport Hovav (2005)** を参照）。とりわけ、概念構造理論においては、語彙概念構造と統語構造のあいだに次のような普遍的な対応関係が仮定されている（**影山 1996**）。

(2) 概念構造と統語構造の対応関係

a. LCS : x ACT/CONTROL/EXPERIENCE/CAUSE



統語：外項（いわゆる主語）

b. LCS : y MOVE/BECOME/BE



統語：内項（目的語、あるいは目的語相当の主語）

LCS 上で、ACT, CONTROL, EXPERIENCE, CAUSE があれば、その主語 (x) が外項に対応する。これらの意味述語は、影山 (1996) で上位事象 (*superordinate event*) と呼んだ事象タイプを規定するものであり、これらは行為連鎖におけるエネルギーの源に関わるために、それがあれば、その項が優先して主語となる。他方、もし上位事象が存在せず、MOVE, BECOME, あるいは BE で規定される下位事象 (*subordinate event*) だけの場合には、その項 (y) が主語となるが、統語構造では内項（目的語と同等）の位置に生成される。

以上を総合すると、日本語では見かけ上は「ガ格」という同一の格形態で標示される「主語」であっても、語彙概念構造の形式によって、(2 a) の x に当たる主語は外項、(2 b) の y に当たる主語は内項として、統語構造では明確に区別されることになる。「主語」が外項と内項に分かれるという考え方は非対格性の仮説 (*Unaccusative Hypothesis*) と呼ばれ、自動詞のうち、外項を主語に取るものは非能格動詞、内項を主語に取るものは非対格動詞と称される。Perlmutter and Postal (1984) はこの 2 種類の自動詞の区別が各々の動詞の意味的性質に由来することを示唆しており、動作主性・意図性や、アスペクトの完結性 (*telicity*) といった意味概念が重要であることが明らかになっている（最近の研究として Alexiadou et al. (eds.) 2004 を参照）。影山 (1996) の語彙概念構造 (LCS) は、これらの意味概念を出来事構造に盛り込んだものである。

非対格性の仮説、および意味と統語の普遍的な対応関係に照らし合わせる

と、擬態語動詞は極めて重要な理論的意義を秘めていることが分かる。すなわち、従来、明瞭な語彙の意味を持たないとされてきた擬態語が、もし(1)の7タイプにまとめたような明確な語彙概念構造を持つとすれば、(2)の対応規則に従って、擬態語動詞にも非対格と非能格の区別が存在するはずである。とりわけ、Aグループ(Type 1~Type 4)のガ格主語は外項になるはずであり、他方、Bグループ(Type 5~Type 7)のガ格主語は内項に位置づけられるはずである(前述のようにBグループのLCSにおけるCOGNIZEの主語は語彙的に抑制されて表面に現れない)。言い換えると、Aグループは非能格動詞(ないし他動詞)、Bグループは非対格動詞の統語的振舞いを示すことが予測される。

以下では、この予測が実際に正しいことを検証する。検証に当たっては、外項を特定する統語現象(第2節)と、内項を特定する統語現象(第3節)を考察し、それらがA、B両グループの擬態語動詞に適合するかどうかをテストする。

2. 外項を指定する統語現象

まず、外項主語に直接言及する現象を見てみる。

2.1. 間接受身文

「夜中に隣人に大声でカラオケを歌われた」のような間接受身文は、二格名詞句として主動詞の外項を指定する(影山 1996, 2006)。「*台風で植木に倒れられた」といった自然発生的な出来事を間接受身文で表すことができないのは、「植木に」が外項ではなく内項であるためである。ただし、同じ「倒れる」でも、「大事なときに社長に倒れられた」という例では「病気になる、入院する」という意味なので、「社長」は経験者(外項)であるから適格となる。このテストを擬態語動詞に当てはめると、Aグループは(3)、Bグループは(4)のようになる(以下の例文は、いちいち出典を示さないが、ほとんどが

インターネットから取ったものである)。

(3) **Type 1** : 毎日, 夫に家でぶらぶらされているの。

Type 2 : 酔っぱらいに玄関のドアをバンバンされた。

Type 3 : 知らない人に家の前をうろちょろされた。

Type 4 : ささいなプレゼントなのに, 予想外にびっくりされた。

(4) **Type 5** : *大事な試験だというのに, 頭にズキズキされた。

Type 6 : *データを入力中に, 画面にチカチカされた。

Type 7 : *スープの味にあまりにあっさりされた/あっさりしていられた。

(3) は文法的であるが, (4) は認められない。この違いは, **A** グループの主語が外項であるのに対して **B** グループの主語は内項であることを示している。

2. 2. 「～に行く/来る」型の移動目的構文

「図書館に本を借りに行く」のような構文では, 移動の目的を表す「～に」節に入る動詞は他動詞または非能格動詞に限られる。なぜなら, 目的を持って行動するためには, 意図的な動作主が必要だからである。その結果, 動作主を持たないとされる非対格動詞はこの構文と整合しない。

(5) 彼は屋上から {飛び降り (非能格)/ *転げ落ち (非対格)} に行った。この構文を擬態語動詞に当てはめると, **A** グループ (6) は文法的であるのに, **B** グループ (7) は非文法的になるという予想通りの結果が得られる。

(6) **Type 1** : 温泉に, のんびりしに行こう。

Type 2 : 看護婦は, 赤ちゃんの背中をトントンしに来た。

Type 3 : 主婦は子供を連れて, 商店街をうろうろしに行った。

Type 4 : ぜひ, ワンちゃんと一緒に「ほっと」しにいらして下さい。

(7) **Type 5** : *女性達は肌がスベスベしに温泉に行った。

Type 6 : *彼は椅子がグラグラしに来た。

Type 7 : *料理人はスープの味があっさりしに来た。

2.3. 動詞反復構文

次に、「犯人は、泣き泣き、身の上を話しはじめた」や「不平を言い言い、働いた」のような動詞反復構文 (Martin 1975: 409) を見てみよう。この構文は、動作主 (8) ないし経験者 (9) を主語にとる動詞に成立するが、内項を主語にとる非対格動詞 (10) には当てはまらない。

(8) 動作主主語 (意図的。外項)

- a. 喧嘩しいしい, まだ夫婦を続けています。
- b. 散歩しいしい／試行錯誤しいしい／言い訳しいしい

(9) 経験者主語 (非意図的。外項)

- a. 沖田総司は池田屋斬込みの際, 咯血しいしい, 十数人を斬った。
- b. 心配しいしい／苦笑しいしい／病氣しいしい／緊張しいしい

(10) 変化対象主語 (内項)

- a.* 疲れ切った旅人は, 倒れ倒れ, 歩いた。
- b.* 墜落しいしい／*落下しいしい／*存在しいしい／*発生しいしい

この構文も A グループ (11) に成立するが, B グループ (12) には成立しない。

(11) Type 1: 夫は, 毎日, あくせくしいしい…

Type 2: 看護婦は赤ん坊の背中をとんとんしいしい

Type 3: 商店街をうろうろしいしい……

Type 4: はらはらしいしい, 決勝戦を見ていた。

(12) Type 5: *私は, 頭がずきずきしいしい, 学校に行った。

Type 6: *椅子がぐらぐらしいしい, 座っていた。

Type 7: *スープの味があっさりしいしい……

以上では, 補文の主語として外項を選択すると考えられる構文が, A グループの擬態語動詞には一律に成立し, B グループにはすべて成立しないことを見た。この結果から, A グループのガ格主語は外項であるが, B グループのガ格主語は外項でないという結論が導き出される。次節では, 逆に, 内項を特定するような統語現象を観察し, 本節での結果が正しいことを裏付ける。

3. 内項を指定する統語現象

本節では、内項に直接関わる現象として、統語構造での複合語形成と、並行動作を表す「ナガラ」節を取り上げる。

3.1. 統語的複合語形成

統語構造での複合語形成 (**post-syntactic compounding**: Shibatani and Kageyama 1988, 影山 1993) は統語構造において、内項——すなわち、他動詞の目的語または非対格動詞の主語——を **VN (Verbal Noun)** に編入する規則である。(13) は、他動詞 **VN** が目的語を編入し、主語は編入できないことを例示している。以下では、[] の部分が複合語を、その内部の「:」は音声の区切れを表す。

(13) ロンドンで漱石がシェイクスピアを研究中に、…

→ a. ロンドンで漱石が [シェイクスピア:研究] 中に

b.* ロンドンでシェイクスピアを [漱石:研究] 中に

VN が「する」を伴わずに名詞として用いられる場合も、同じ条件である。

(14) 未成年者の酒類の購入は禁止されています。

→ a. 未成年者の [酒類:購入] は禁止されています。

b.* 酒類の [未成年者:購入] は禁止されています。

重要なことは、主語であっても、(15) のように非対格 **VN** の場合は内項であるから、複合化が認められるということである。

(15) 山下さんに長男が誕生の際…

→ 山下さんに [長男:誕生] の際

逆に、(16) のような非能格 **VN** の主語は、外項であるから複合化されない。

(16) 図書館で小学生が勉強中に

→*図書館で [小学生:勉強] 中に

以上から、ガ格主語が複合化できれば内項、できなければ外項であるという

ことになる。このテストを擬態語動詞に当てはめると、**B** グループのガ格主語は複合化できるが、**A** グループのガ格主語は複合化できないことが予想される。実際のところ、擬態語動詞の複合語は日常的にあまり頻繁に起こらないが、インターネットで検索すると、おもしろい例が出てくる。まず、**B** グループの **Type 5** と **Type 6** に当たる例を (17) に示す。

(17) **Type 5** : 私の [心臓：ばくばく] も更年期だったのかもしれない。

一回滑れば [膝：ガクガク] のモーグルコース

原因不明の [頭：フラフラ] はまったく止む様子もなく…

Type 6 : ふとん乾燥機で [お布団：ふわふわ]。

そのころは [画面：チラチラ] が当たり前だった。

(17) に挙げた例はいずれも口語的な表現であるが、しかし日本語として文法的であるという判断は比較的明瞭に下すことができる。これに対して、外項主語を取ると考えられる **A** グループでは、この複合化を認めるのは極めて難しい。

(18) **Type 1** : *[夫：あくせく] の毎日 / *[主婦：ぺちゃくちゃ] の時間帯

Type 2 : 主婦の [布団：ばんばん] の話題が出たついでに

*布団の [主婦：バンバン]

Type 3 : [お台場：うろうろ] の高校生達

*[高校生：うろうろ] のお台場

Type 4 : *[両親：がっかり] の成績

*[消費者：がっかり] の政府案

特に、外項と内項の両方を取る **Type 2** と **Type 3** で、内項を複合した場合 (例えば「お台場うろうろ」) と、外項を複合した場合 (例えば「*高校生うろうろ」) を比較すれば、違いはかなりはっきりしている。

ただし、**B** グループでも **Type 7** の擬態語は複合化しにくいようである。

(19) *[味：あっさり] のラーメン, *[顔：ぼっちゃり] の女の子

しかしその代わりに、**Type 7** の擬態語は次のような語彙的複合語が可能である。

(20) あっさり味, ぼっちゃり顔, どろどろ血, つやつやヘア

Type 7 の表現は、特定の出来事ではなく、ガ格名詞の属性を表すため、統語的な複合語より語彙的な複合語のほうが整合するのであろう（複合語における出来事の叙述と属性の叙述については影山（印刷中）を参照）。

3. 2. ナガラ節内のガ格主語

(21) に示されるように、並行動作の意味では、ナガラ節の主語は主節の主語と同一指示になるのが原則である。

(21) a. 彼女_iはいつも [PRO_i [VP 音楽を聞きながら]] 料理を作る。

b.* 彼女はいつも [夫が [VP 音楽を聞きながら]] 料理を作る。

並行動作のナガラ節は、南（1974）の従属節の分類では A 類に属し、その内部にガ格主語が入らないのが普通である。

ところが、南（1993）では並行動作のナガラ節でもガ格主語が生じる場合があるとして、次の例を指摘している。

(22) a. …思わず顔がゆがみそうになりながら。

b. …打撃を受け、意識も霞みながらその場に昏倒した。

（2例とも北杜夫『榆家の人々』より。南（1993：120）に引用）「顔がゆがむ、意識が霞む」は非対格動詞であるが、しかし、非対格動詞なら自由に主語がナガラ節に入るというわけではない。（23）は非文法的である。

(23) a. *私は [太陽の光がさんさんと降り注ぎながら] 日向ぼっこをした。

b. *住民は [津波が押し寄せながら] 山のほうに逃げていった。

(22) と (23) の違いは主語になっている名詞の性質に求められる。(23) の「太陽の光、津波」はそれ自体で存在するが、(22) の「顔、意識」はいわゆる相対名詞で、「顔、意識」の所有者としての人物が想定でき、統語構造ではその人物が大主語（ないし主題）として想定される。

(24) [私は] [顔がゆがむ], [私は] [意識が霞む]

この観察から、並行動作のナガラ節でガ格主語が現れるのは、そのガ格主語と関係する大主語（すなわち外項）が想定される場合に限られ、従って、ガ格主語そのものは統語構造で「内項」の位置を占めると考えることができる。

(25) 主節主語_i [PRO_i (大主語) [vp ガ格主語 動詞]ーながら] 主節動詞
この公式に基づいて擬態語動詞がナガラ節に納まるかどうかを検討してみよう。

まず、外項主語を取る A グループは、予想通りナガラ節に適合しない。

(26) **Type 1** : *主婦は、[夫が会社であくせくし] ながら、買い物に出かけた。

Type 2 : *母親は、[看護師が赤ん坊の背中をとんとんし] ながら、ベッドで寝ていた。

Type 3 : *夫は、[妻がデパートをうろうろし] ながら、子守をした。

Type 4 : *先生は、[生徒が試験結果にがっかりし] ながら、将来の進路を考え直した。

また、B グループの中でも、**Type 6** は適合しない。

(27) **Type 6**

a. *花子は、[セーターがちくちくし] ながら、外出した。

b. *一家は、[台風で玄関ががたがたし] ながら、布団をかぶって寝た。

Type 6 の擬態語動詞は、統語構造では内項であるガ格主語しか取らず、大主語は持たないと考えられる。

他方、「このラーメンは味があっさりしている」のような **Type 7** の擬態語動詞は、単にガ格主語 (味) の状態を述べるだけでなく、「味があっさりする」全体が、「味」の所有者である「このラーメン」の属性を描写するという二重構造になっている (属性の叙述を、上述 (1) の LCS ではラムダ演算子 (λy) で表している)。属性の所有者である「ラーメン」を大主語 (外項) とすると、**Type 7** のガ格主語は内項としてナガラ節に納まるはずである。実際、**Type 7** のガ格主語をナガラ節に入れた (28) のような表現は全く適格である。

(28) **Type 7**

a. このラーメン_iは、[PRO_i 味があっさりしてい] ながら、同時にコクがある。

- b. レタス_iは、[PRO_i 歯触りがしゃきしゃきして] ながら、同時に水分もある。

では、Type 5 はどうだろうか。Type 5 の LCS は、Type 6 の LCS とほぼ同じ形式であるから、Type 6 と同じく、その主語はナガラ節に入らないはずである。しかし、インターネットの検索では次のような例が観察された。

(29) Type 5

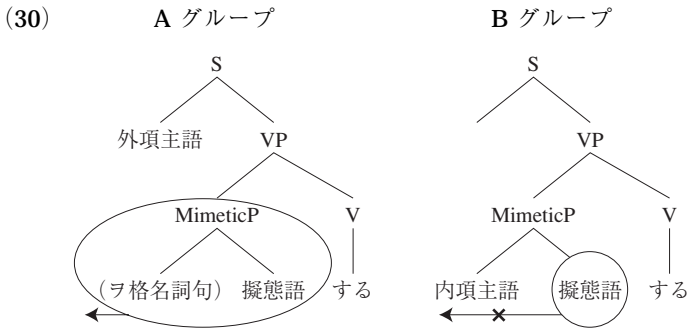
- 高所恐怖症の私は、足がガクガクしながら吊り橋を渡った。
- (私は) 風邪で頭がガンガンしながら布団の中でネットしています。
- 今日は胃がズキズキしながら学校に行った。
- 胸がどきどきしながら先生の話聞いた。

(29) の例は、(28) の Type 7 と比べると許容度が低く、非文法的と見なしてもよいと思われる。おそらく、(29) の例の使用者は、Type 5 の LCS における抑制された外項 (Speaker) を、ガ格主語 (内項) の Speaker's body part と関係づけて、無理矢理、ナガラ節に入れたのであろう。すなわち、本来なら抑制されるはずの所有者 (Speaker) が、間に合わせ的に利用されたものと分析できる。

以上のように、Type 5-6 と Type 7 でナガラ節における生起に違いがある。この観察は、LCS と統語構造との対応関係が極めて一般的であること、そして、LCS に存在しても語彙的に抑制された項は統語構造では利用できないという意味と統語の対応関係が厳然として存在することを裏付けている。

4. 統語構造の検証

これまでは、種々のテストによって A グループと B グループでガ格主語の統語的振舞いが異なることを見た。その結果、A グループのガ格主語は外項、B グループのガ格主語は内項の位置を占めることが明らかになった。この違いを簡略化して樹形図に示すと次のようになる (図では不要な部分は省略してある)。



(30) の構造では、「ドアをドンドン」や「頭がズキズキ」のように、内項と擬態語が全体でひとつの句 (**Mimetic Phrase**) を形成し、それ全体に「する」が掛かっている。この構造は、「東京に出張をする」のような軽動詞構文と同じ形なのだが、ここではその問題には立ち入らない。

(30) の構造で主語の位置に着目すると、(30 A) では外項主語は **MimeticP** より外に位置するのに対して、(30 B) では内項であるガ格主語が、擬態語を主要部とする **MimeticP** の中に収まっている。言い換えると、(30 A) の擬態語動詞は他動詞ないし非能格動詞であり、(30 B) の擬態語動詞は非対格動詞であるということである。一見、実質的な意味を持たないように見える擬態語動詞が、このように、通常の語彙的動詞と同様の分裂自動詞性を見せることが証明できれば、非対格性の仮説を裏付ける強力な証拠となるはずである。

以下では、(30 A, B) で丸囲みの部分を「～は」として取り出せるかどうかを調べてみる。テストとしては、(30 A) と (30 B) の図式にあう例文を作り、6名の日本語話者に判断してもらった。いずれも日本語として完璧と判断されるものはなく、また、個々の例文でも許容度のばらつきがあるが、総体的に、(30 A) に図示した移動のほうが (30 B) の移動より許容しやすいことが分かった。

まず、(30 A) の構造で、**MimeticP** 全体を移動してみる。この場合、**Type 1, 4** は自動詞なので、見かけ上は擬態語のみが移動するよう見えるが、**Type 2, 3** では目的語ないしヲ格経路句と一緒に移動するから、**MimeticP** 全体が関

わっていることが分かる。以下の B 文で、_____ は擬態語が最初あった位置を示す。

(31) Type 1

A: キミはいつも、あくせくしているねえ。

B: ? 今の時代、あくせくは、誰でも _____ してるんじゃないですか？

(32) Type 2

A: 団地の主婦は、布団をパンパンしますねえ。

B: ? 布団をパンパンはどこの主婦でも _____ しますよ。

(33) Type 3

A: ゴキブリが台所をちょろちょろしているようだ。

B: ? いいえ、台所をちょろちょろは、ネズミが _____ してるんです。

(34) Type 4

A: それを聞いて、部長はあたふたしたそうだ。

B: ? いいえ、あたふたは、社長が _____ したんです。

これらの B 文は、日本語として完璧とは言えないものの、比較的容認できる。対照的に、(30 B) で擬態語だけを移動させることは全く認められない。

(35) Type 5

A: それを聞いて、社長は頭がズキズキしたそうだ。

B: **いいえ、ずきずきは、胃が _____ したんです。

(36) Type 6

A: この椅子の脚は、グラグラする。

B: *グラグラは、テーブルも _____ しているよ。

(37) Type 7

A: 麺の味があっさりしているね。

B: **いいえ、あっさりはスープが _____ しているんです。

(30 A) 型の移動と (30 B) 型の移動で、このような差が生じるのはなぜだろうか。それは、前者では MimeticP という句 (XP) 全体を取り立てているのに対して、後者では擬態語という X⁰ カテゴリーだけを取り立てるからであ

る。一般的に言って、統語構造では主要部だけを **wh** 移動ないし名詞句移動させることはできない。主要部は別の主要部の位置にのみ移動することができる（主要部移動の制約：Baker 1988）。従って、(30 B) で **MimeticP** の主要部である擬態語を主題化することは原理的に不可能なのである。

ここで注目したいのは、(35)～(37) の **B** 文が完全に非文法的であるのに対して、(31) と (34) の **B** 文は容認度が比較的高いという違いである。これら 2 組の例文では、どちらも表面的には「あくせく」や「ずきずき」といった擬態語が一語だけ移動しているように見えるから、見かけだけで言えば、これら 2 組に許容度の違いはないはずである。ところが実際には、明確な差異が感じ取れる。従って、見かけ上、擬態語一語かどうかではなく、移動するのが句なのか語なのかという統語的な範疇の違いが決定的であるということになる。

詳しく言うと、(30 A) 型の移動——すなわち、(31)～(34) の **B** 文——は完全には文法的でない。これはおそらく形態的緊密性 (**lexical integrity**: 影山 1993) の制約によるものと思われる。擬態語+「する」の組み合わせは形態的には複合語を構成しないものの、機能的にはこの組み合わせ全体が一種の軽動詞構文として、「語」と同等のまとまりを形成すると考えられる。そのため、(31)～(34) の **B** 文のように擬態語句を「する」から切り離すことが難しいのである。

では、**A** グループの **Type 2** と **Type 3** に (31 B) 型の移動を適用すると、どうなるだろうか？ つまり、**Type 2** と **Type 3** の擬態語動詞で、ヲ格名詞句を後ろに残したまま、主要部である擬態語だけを話題化すると、どうなるだろうかということである。この場合は、主要部移動制約が厳密に適用するため、非常に悪い結果が出ることが予測される。実際、その通りである。

まず、**Type 2** で、ヲ格目的語を後ろに残したまま、擬態語だけを話題化すると (38 B) のように非文になる。

(38) A: 団地の主婦は、布団をパンパンしますねえ。

B: **いいえ、パンパンは、主人の頭を_____するんですよ。

次に、Type 3で、ヲ格経路句を後ろに残したまま、擬態語だけを話題化すると(39 B)のようになる。これも全く認められない文である。

(39) A: 部長は、渋谷の町をうろうろしたそうだ。

B: **いいえ、うろうろは、歌舞伎町を_____したんです。

興味深いのは、(38 B)と(39 B)が、Bグループで擬態語だけを移動した(35 B)～(37 B)と同じ程度に非文法的になってしまうということである。このことは、(35 B)～(37 B)において移動せずに残されたガ格主語が、(38 B)～(39 B)において残留するヲ格名詞句と同等の統語的位置(すなわち「内項」)にあることを立証している。

5. 結 論

第1節で述べたように、語彙意味論の作業仮説は「動詞の統語的な振舞いはその意味的特性から予測できる」という考え方である。擬態語は一見、意味的な実体を持たず、そのため、この「統語と意味の対応仮説」には当てはまらないように見える。しかし実際は、擬態語も文法的に有意義な概念的意味を備えており、その意味的性質から統語構造のあり方が予測できる。従って、擬態語は「統語と意味の対応仮説」に対する反例ではなく、むしろ、この仮説の妥当性を裏付けるものと見なすことができる。

Aグループは典型的に人間を主語(外項)にとる動詞であり、その主語は統語構造上も、いわゆる「主語」の位置にある。他方、Bグループにおいては、意志を持たない物体名詞がガ格主語として具現され、そのガ格主語は「主語」でありながら、統語構造上は目的語と同等の位置(内項)にある。この結果は、擬態語という、これまで看過されてきた語彙から、非対格性の仮説に対して新たな支持を与えるものである。とりわけ、非対格動詞の主語が、統語的複合語が形成されるS構造においても内項の位置に留まるという観察は理論的に重要である。

注

本稿は、The 2nd Oxford-Kobe Linguistics Seminar (2004年9月)、関西言語学会第29回大会シンポジウム「非対格性の根源を探る」(2004年10月)、および東京大学21世紀COE「心とことば」のシンポジウム「語彙概念構造辞書の構築と応用」(2005年3月)で発表した擬態語動詞の意味構造と統語構造に関する講演の中で、統語構造に関する部分を略述したものである。

参考文献

- Alexiadou, Artemis, Elena Anagnostopoulou, and Martin Everaert (eds.) (2004) *The Unaccusativity Puzzle*. Oxford University Press.
- 阿刀田稔子・星野和子(1995)『擬音語・擬態語使い方事典』創拓社.
- Baker, Mark (1988) *Incorporation*. University of Chicago Press.
- Hamano, Shoko (1998) *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Kuro시오.
- 影山太郎 (1993)『文法と語形成』ひつじ書房.
- 影山太郎 (1996)『動詞意味論——言語と認知の接点——』くろしお出版.
- 影山太郎 (2006)「日本語受身文の統語構造」, 影山太郎 (編)『レキシコンフォーラム No. 2』181-234. ひつじ書房.
- 影山太郎 (印刷中)「外項複合語と叙述のタイプ」, 益岡隆志・森山卓郎・野田尚史 (編)『日本語文法研究の新地平』くろしお出版.
- Kageyama, Taro (近刊) “Explorations into the conceptual semantics of mimetic verbs.”
- Kakehi, Hisao, Ikuhiro Tamori, Lawrence Schourup (1996) *Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*, 2 vols. Mouton de Gruyter.
- Kita, Sotaro (1997) “Two-dimensional semantic analysis of Japanese mimetics,” *Linguistics* 35: 379-415.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations*. University of Chicago Press.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (2005) *Argument Realization*. Cambridge University Press.
- Martin, Samuel (1975) *A Reference Grammar of Japanese*. Yale University Press.
- 南不二男 (1974)『現代日本語の構造』大修館書店.
- 南不二男 (1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店.
- Perlmutter, David and Paul Postal (1984) “The 1-advancement exclusiveness law,” in David Perlmutter and Carol Rosen (eds.) *Studies in relational grammar 2*, 81-125. University of Chicago Press.

- Shibatani, Masayoshi and Taro Kageyama (1988) “Word formation in a modular theory of grammar,” *Language* 64 : 451–484.
- 田守育啓・Lawrence Schourup (1999) 『オノマトペ：形態と意味』くろしお出版.
- Tsujimura, Natsuko (2001) “Revisiting the two-dimensional approach to mimetics : A reply to Kita (1997),” *Linguistics* 39 : 409–418.
- Tsujimura, Natsuko (2005) “A constructional approach to mimetic verbs,” in Mirjam Fried and Hans Boas (eds.) *Grammatical Construction*, 137–154. John Benjamins.